

平成三十年度

宮崎県文化講座研究紀要

第四十五輯

宮崎県立図書館

序 文

宮崎県立図書館主催の「宮崎県文化講座」は、昭和四十九年度に「宮崎県地方史講座」として開設し、平成十九年度からは地域の歴史のみならず、自然科学などにも範囲を広げた幅広い文化の発信と理解を目指して、「宮崎県文化講座」と改称し現在に至っております。

例年、宮崎県の歴史・考古・民俗・人物・地理・地質・災害などに関して研究をされておられる方々の中から講師を招聘し講座を開催しておりますが、平成三十年度は、田中敏雄氏「甦れ！古代ロマン復元住居再生事業」、川原一之氏「和合の里 土呂久」、佐藤登士夫氏「日本一の宮崎牛を目指して」の計三回を実施し、多くの方々のご参加をいただいたところでした。

さらに、それぞれの講座の内容は、講師の方々に文章にまとめていただき、「宮崎県文化講座研究紀要」(第三十三輯までの名称は「宮崎県地方史研究紀要」として毎年発行し、宮崎の歴史・文化等に関する調査・研究に資することに努めております。

今後とも当館の研究紀要が、「ふるさと宮崎」の歴史や文化の研究の一助となり、県民の皆様の生涯学習の推進に役立つことができれば、大変幸せに存じます。

最後になりましたが、今回刊行される「宮崎県文化講座研究紀要」第四十五輯に御寄稿いただきました三名の先生方、講座開催にあたり御協力をいただきました関係各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成三十一年三月

宮崎県立図書館長 **金子 洋士**

目次

一	田中敏雄	「甦れ！古代ロマン復元住居再生事業」……………	1
		……………	12
二	川原一之	「土呂久公害前史」……………	15
		……………	32
三	佐藤登士夫	「日本一の宮崎牛を目指して」……………	35
		……………	51

甦れ！古代ロマン復元住居再生事業

宮崎県立西都原考古博物館

田中 敏雄

目次

一 はじめに

二 古代復元住居再生事業について

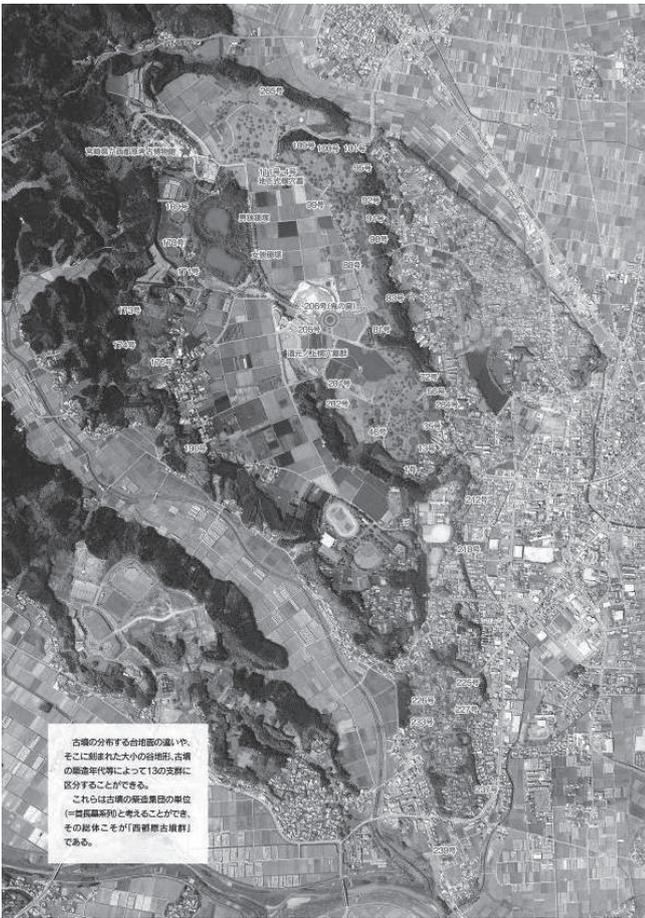
三 事業の実際

四 おわりに

一 はじめに

宮崎県立西都原考古博物館は、九州の東南にある宮崎県西都市に所在する。

西都原古墳群は、日本最大の帆立貝形古墳である男狭穂塚（おさほづか）、九州最大の前方後円墳である女狭穂塚（めさほづか）（男狭穂塚・女狭穂塚はともに宮内庁によって陵墓参考地に治定されている）をはじめ、三世紀末から七世紀前半にかけて築造された大小の前方後円墳・円墳・方墳等三〇〇基以上と横穴墓・地下式横穴墓で構成される、日本を代表する古墳群である。この古墳群の一角に位置している宮崎県立西都原考古博物館は、特別史跡西都原古墳群に臨むサイトミュージアム（Site Museum）であり、豊かな自然と優れた歴史的文化的景観を包括したフィールドミュージアム（Field Museum）である。



西都原古墳群全景

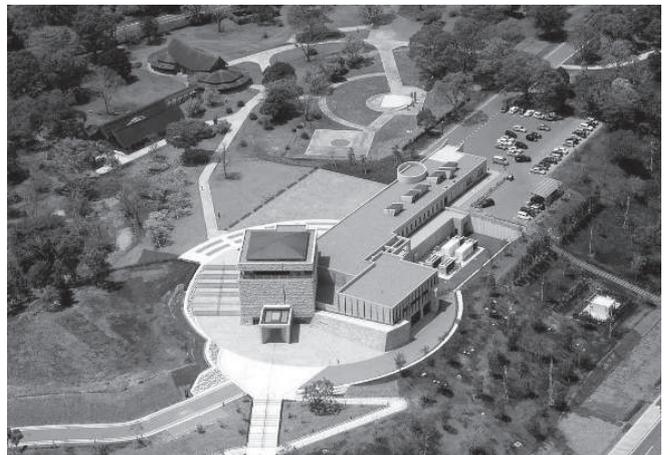
また、博物館の構成施設である古代生活体験館は、西都原考古博物館に先行して一九九七年に設置された。古代人の生活を実体験することを通して、「自然との共存」「古代人の知恵と工夫」を学ぶとともに、「文化財を大切にする心情や態度」を培うことを目的としている。

古代人の暮らしを体験的に学ぶためのメニューは、粘土を用いた土器・埴輪・土鈴・土笛づくり、滑石を加工する勾玉づくり、竹笛づくり、頁岩を用いた石器づくり、弓錐式の火起こし、アンギン（編物）でのコースターづくり、ガラスを熱して加工する蜻蛉玉づくりなどを準備している。

西都原考古博物館の一角に位置する古代復元住居は、一九九六年から開始された「史跡等環境整備計画（風土記の丘整備事業）」によって、博物館の前身である旧西都原資料館の付属施設として設置

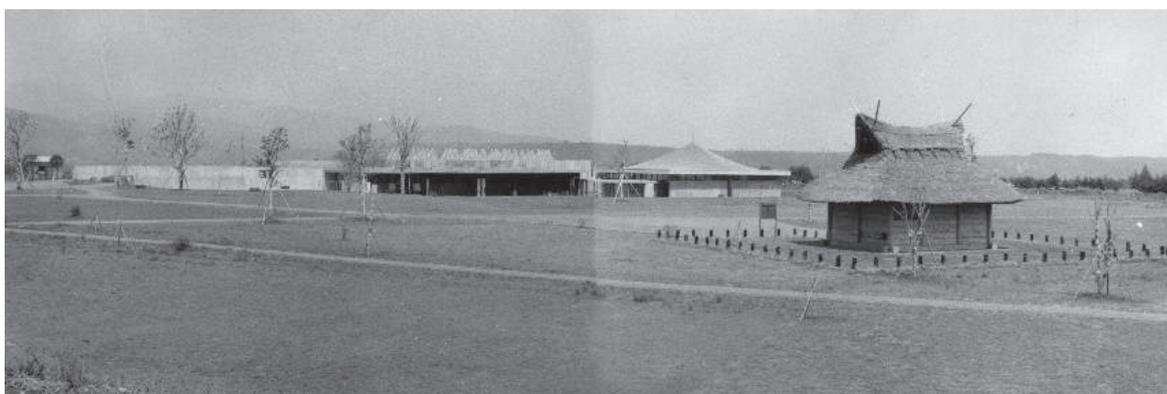


古代生活体験館



西都原考古博物館

されたものである。この風土記の丘整備事業は、歴史的景観の創出を目的としたものであり、古代復元住居もまさに景観の一部として定着している。



建設当時の様子

この家屋は、古墳時代の平地住居である。復元は、当時の東京国立文化財研究所長関野克氏の設計指導によるもので、五世紀ころの家屋文鏡や埴輪を参考にし、建築された。

単に外形だけでなく、建築技術も当時のものを復元するように努めていることから、古墳時代の家屋を知るうえで貴重な資料となっている。

古墳時代の家屋としては、このほかに高床住居、高床倉庫、竪穴住居などがある。屋根はこの家屋の入母屋造のほかに切妻造や寄棟造などがある。

二 古代復元住居再生事業について

(一) 事業概要

古代復元住居は、設置から半世紀近い年月が経過し、茅葺き屋根の劣化が著しく、改修が必要な状態となっていた。この改修作業を専門業者に委託するのではなく、地域在住の技術の継承者の協力を得て、県民参加型のイベントとして二年をかけて古代復元住居の改修を行った。また、資材の確保から改修までの各工程は、文化と技術の継承のため詳細に記録を残した。

事業初年度（二〇一五年度）は、改修に向けて必要な材料の準備期間とし、二〇一六年度は、確保した改修資材を用いて屋根の葺き替えを行った。

(二) 屋根の葺き替え工事

古代復元住居は、一九九六年の建設以来三回の屋根の葺き替え工事を行ってきた。これは、全て宮崎県内の専門業者による工事である。



2回目の葺き替え（1986年2月）
上：改修前 下：改修後



1回目の葺き替え（1974年12月）
宮崎日日新聞（1974年12月5日付）より



改修前の状況（2015年4月）



3回目の葺き替え（1997年4月）
古代生活体験館建設のための移設時

三 事業の実際

(一) 二〇一五年度(全六回)

第一回 二〇一五年七月二十六日(日)
「オリエンテーション」

最初のオリエンテーションを実施した。参加者は四十五名のうち二十七名。今後の日程や活動内容、服装などについての説明と古代復元住居の現況見学を行った。



ボランティア参加者27名(2015年4月)

第二回 二〇一五年八月九日(日)
「ヒノキの伐採、樹皮剥がし」

西都市銀鏡のヒノキ林において、伐採したヒノキの樹皮を剥がす作業を行った。木を削って作った専用の工具を用いて、樹皮を少しめくり、そこから手で剥がしていく。昼食は、猟師が動物に遭遇した際にすぐに行動できるような立ったまま片手でも食べられる「狩人飯(かりんどめし)」を食べた。最終的には、約40本のヒノキの樹皮を剥がした。作業の最後には、指導者の方たちが、古くからの地に伝わる「木おろし歌」を披露した。静かな林の中に響く歌声が感動的であった。



斜面地でのヒノキ樹皮剥ぎ作業



狩人飯(かりんどめし)

第三回 二〇一五年十月十一日（日）
「茅場見学、茅縛り体験」

屋根を葺くためには、大量の茅を確保する必要がある。西都市と西米良村の境にある烏帽子岳の茅を使うため、茅場の見学と蔓を使った茅縛りの体験を行った。



蔓で茅を縛る作業



登山道を歩いて茅場へ向かう

第五回 二〇一五年十二月六日（日）
「銀鏡神楽見学」

茅刈り作業の予定で集合したが、前日からの雨のため茅場の状況が悪く、作業は中止とした。そのため、毎年十二月十四日に銀鏡神社で奉納される国の重要無形文化財である「銀鏡神楽」の通し稽古を見学した。

銀鏡神楽についての概要説明を聞いた後、神楽殿に移動して稽古を見学した。普段は目にするのできない貴重な体験となった。

第六回 二〇一六年二月七日（日）
「茅の移動・収納」



茅の積み込み作業



茅の搬入作業

第四回 二〇一五年十一月十五日（日）
『講座「古代住居を学ぼう」』

当館学芸員が、画像や模型などを用いて、これまでの発掘事例を紹介し、人間の住処・住まいについて学んだ。その後、古代復元住居の現況確認をした。

十二月中に刈った茅は、一か月以上その場で乾燥させていた。茅を茅場から運び出し、大型トラック一台、軽トラック二台に積み込み、改修前の古代復元住居に収納した。

(二) 二〇一六年度 (全六回)

第一回 二〇一六年七月十七日 (日)
「説明会、竹の伐採」

二〇一六年度の活動内容を確認するため、説明会を行った。屋根の骨組みの材料となる竹を伐採し、古代復元住居横に搬入した。

第二回 二〇一六年八月二十一日 (日)
「安全祈願、屋根の解体」

屋根の改修作業の安全祈願のため、神事を執り行った。その後、前年度から住居内に保管していた茅を移動させ、屋根の古茅を全て取り除く作業を行った。作業には、考古博物館少年団の団員も加わった。最終的に、屋根の骨組み解体まで行った。



屋根解体作業



神事 (安全祈願)



屋根の解体完了

第三回 二〇一六年八月二十七日（土）
「屋根の組立て」

昨年度伐採し、樹皮をはがした木材（ヒノキ）を屋根に上げる作業をした。参加者は、高所での作業は危険なため、解体した木材の整理や釘抜き等を行った。さらにこの木材を使って、簡単な椅子やテーブルを製作した。



縄による組立て作業



竹の骨組み（横方向）



ヒノキの骨組み（縦方向）

第四回 二〇一六年九月十日（土）
「茅葺き作業①」

茅葺きの基準となる四隅の茅（シユギ）の一段目の取り付けから開始した。シユギの取り付け後、平側と妻側の四つの面に対し、軒となる下側から順に茅束を縛り付けていく。一つの面に一段ごとに茅束を取り付けた後、上から竹で押さえ、骨組みに縛り付けて葺きあげていく。二段目まで葺きあげた時点で、昨年度に用意した茅を全て使い切ったため、再度、冬場に茅刈りを行ってから、作業の続きを行うこととした。

第五回 二〇一七年二月二日（木）～三月一日（水）

「茅葺き作業②」

十二月に新しく刈った茅を搬入し、茅葺き作業の続きを行った。実働日数十二日間、指導者を中心に、延べ六十人の作業となった。（茅葺き作業の工程については後述する。）

第六回 二〇一七年三月十一日（土）

「落成式」

古代復元住居の落成式を実施した。無事に完成したことを祝う神事やせんぐまき（餅まき）を行った。改修作業の参加者も数多く参列し、完成を祝った。



神事（完成祝い）



せんぐまき（餅まき）

（三）茅葺き作業の工程

① シュギ（基準となる四隅のこと）に使う茅の束。直径三〇cmほどの束を四束縛り、それらを三つ組み合わせる。

② ①の茅束をシュギに縄で縛り付け、さらに青竹で押さえつけて固定する。

③ シュギの取り付け後、平側と妻側の四面に茅束を骨組みの竹や木に縛り付けていく。縄は、使いやすいように巻きなおして腰にぶら下げておく。

④ 茅束や押えの竹を骨組みに縛り付けるときは、内側から竹の「ハ

リ」を使って、縄を通していく。内側と外側の人との連携作業である。内側の人のことは「ハリを持つ人」ということで「はつどん」と呼ばれる。

⑤ 各面の一段ごとに茅束を縛り付けた後に、その上から丸太で茅を押さえていく。これが、足場にもなり、上の段の作業をする際の基準線にもなる。

⑥ 縛り付けた茅束をさらに押し込み、整えるために、「シャヅチ」という道具で叩く。

⑦ 一番上の棟木まで茅束を被せた後、茅を押さえるために、太めの丸太をのせて固定する。

⑧ 仕上げに、茅を刈りそろえる。上から順に刈りそろえ、足場の丸太を外しながら下りていく。



③



①



④



②



⑦



⑤



⑧



⑥

四 おわりに

茅葺き屋根という日本古来の文化と技術の一部をボランティアとして参加していただいた県民の皆様と学ぶことができました。今後、も葺き替えをした屋根を少しでも長持ちさせるため、「火入れ」を継続し、できるだけ良い状態で公開展示できるようにしていきます。

この事業は、東米良匠の会の皆さんのご協力無くしては実施できませんでした。最後にこの場を借りて改めてお礼申し上げます。



指導者（東米良匠の会）

土呂久公害前史

記録作家

川原 一之

目次

I 章 祖母・傾・大崩山系の地質

- 1 | 1 ヌネスコエコパーク
- 1 | 2 祖母・傾・大崩山系と硫砒鉄鉱
- 1 | 3 佐伯の亜砒酸工場

II 章 土呂久の歴史と民俗

- 2 | 1 とろくの語源
- 2 | 2 落人伝説の里
- 2 | 3 修験の道場
- 2 | 4 西国一の長者をうんだ銀山

III 章 土呂久鉱山史

- 3 | 1 江戸中期の煙害
- 3 | 2 幕末の繁栄
- 3 | 3 渡り鉱夫の墓
- 3 | 4 明治以降の土呂久鉱山

IV 章 土呂久の産業

- 4 | 1 狩猟採取
- 4 | 2 焼畑から常畑へ
- 4 | 3 水田の開発
- 4 | 4 畜産の伝統
- 4 | 5 山の自然とともに

V 章 解体期の共同体

- 5 | 1 和合会創設
- 5 | 2 創設者
- 5 | 3 自治組織に発展

I 章 祖母・傾・大崩山系の地質

1-1 ユネスコエコパーク

宮崎県高千穂町の土呂久は、「生物圏保存地域」(通称・ユネスコエコパーク)に登録された祖母・傾・大崩山系に位置する標高350〜800メートルの谷間の集落である。2018年10月1日現在の世帯数35、人口78(男44、女34)の過疎の進む小集落で、エコパークの核心地域を取り囲む緩衝地域の外側の移行地域にはいつている。

祖母・傾・大崩山系がエコパークに登録された理由は、①急峻な山岳地形と美しい溪谷、②幅広い植生と希少性の動物、③自然への畏敬の念とともに、自然保護活動や自然資源の持続的活用が図られているからだとされている。なぜこの地域に急峻な地形がみられ、希少な生物種の宝庫となっているのか、その背景にあるのが、祖母・傾・大崩山系特有の次のような地質である。

- i もともとは海底だったところに砂や泥が堆積し、やがて隆起して陸地になった。
- ii 約1400万年前から火山活動が活発になり、まず傾山が噴火し、ついで祖母山が噴火して、火砕流台地ができ、陥没によってカルデラを形成、その後の浸食によって現在の地形になった。
- iii 大崩山では、マグマが地表近くまでせり上がり、そのときに沈んだ地域の周縁にできた割れ目にマグマが貫入して、楕円状に巨岩・奇岩が林立する急峻な環状岩脈(リングダイク)を形成した。

この地域では、海底にあったときに堆積した地層が、新生代の第三紀(2250万年前〜180万年前)の火山活動によって火成作用を受け、岩石類が変化して鉱床を形成した結果、多くの鉱山が

開発された。現在は操業していないが、かつて操業した知名度の高い鉱山に、木浦、豊栄、尾平(以上、大分県)、土呂久、見立、楨峰(以上、宮崎県)があった。短期間掘削された小鉱山は数知れず、高千穂町史は「第四章鉱業」の概説で「高千穂地方は新第三紀に花崗岩の貫入などの火成作用が行なわれ、これに関連して、錫、銅、鉛、亜鉛、砒素、硫化鉱、その他多くの鉱種を含む鉱脈が多数存在している。特に鉱種の多さに於いては九州第一位であり、この地域一帯の地下資源は、我が国主要鉱物の宝庫とさえいわれている」①と記している。

1-2 祖母・傾・大崩山系と硫砒鉄鉱

宮崎県が1963年に刊行した「宮崎県の地質と地下資源」は、第2編概説の「接触鉱床および高温型鉱脈」の中で、土呂久鉱山の地下資源について、「土呂久鉱床は古生界とこれを切る花崗斑岩の岩脈との接触部にある接触鉱床であって、主に石灰岩中あるいは石灰岩の縁りに形成された不規則な塊状、レンズ状、短い脈状などの鉱体群から成り、極めて多種の鉱物を産する。すなわち、金属鉱物



【祖母・傾連山の鉱山分布地図】

としては硫砒鉄鉱・磁硫鉄鉱・黄銅鉱・方鉛鉱・閃亜鉛鉱・錫石・黄鉄鉱・磁鉄鉱・赤鉄鉱・輝安鉱・白鉄鉱など、鍾石鉱物としては柘榴石・珪灰石・灰鉄輝石・透輝石・透角閃石・陽起石・橄欖石・ベスブ石・緑簾石・黝簾石・黒雲母・リシヤ雲母などの接触変性鉱物や、電気石・斧石・ダンブリ石・スカポライトなどの気成鉱物のほかに、石英・方解石・アルカリ長石・菱鉄鉱・石膏が知られている。また2次鉱物として、褐鉄鉱・白鉛鉱・黄鉛鉱・青鉛鉱・異極鉱・カレドニア石・レッドヒル石・藍銅鉱・孔雀石・珪孔雀石・葱臭石などがみいだされている^②と、きわめて多種の珍しい鉱物を産出する鉱山だったことを述べている。これら多彩な鉱物の最初に書いてあるのが硫砒鉄鉱である。

硫砒鉄鉱 (FeAs₂) は、その名前からわかる通り硫黄と砒素と鉄を主な成分とする鉱石であり、金槌でたたくと簡単に割れて、それを焙焼すれば砒素は亜砒酸 (As₂O₃)、硫黄は亜硫酸ガス (SO₂) になって煙とともに流れだし、あとに酸化鉄 (Fe₂O₃) を主成分とする鉱滓 (焼き殻) が残る。祖母・傾・大崩山系の各所で硫砒鉄鉱を焙焼して亜砒酸を採取した歴史が、この地域の郷土誌に記されている。古い文献では、明治37 (1904) 年12月に大分県の木浦鉱山を訪ねた林勝美が「駄債形尾に登り、亜砒酸製造を見る。其一带山の斜面は草木枯死して鉱毒の深刻さを如実に物語る。荒廃さは木浦山中の一奇観である」という紀行文^③を残している。

2005年3月24日の大分合同新聞には、九州大学の井沢英二名誉教授 (資源工学、鉱床学) らの調査で、緒方町 (現・豊後大野市) 上畑の山中で見つかった石組みの精錬窯が約100年前の亜砒焼き窯だ、と確認され、亜砒焼き窯は全国に現存例がないので「貴重で興味深い発見」と話している、という記事が掲載された。

20世紀のはじめ、祖母・傾連山では硫砒鉄鉱を採掘する鉱山がいくつもあって、亜砒酸が製造されていたことがわかる。

1-3 佐伯の亜砒酸工場

中でも注目されるのは、祖母・傾連山の 大分側産物の積出港であった佐伯市の市史が、「市民生活と公害」の節で大正年間の亜砒酸工場による公害を記述していることだ。そこには、「大正5年10月頃宮城正一氏の経営にかかる灘鳥越の亜砒酸工場が煙毒問題の為に、翌年4月頃苦木に移転していることは当時本紙に報道せる所なるが……」という大正8 (1919) 年7月27日の佐伯新聞の記事が引用され、さらに「当時本紙に報道せる所」の説明として、大正6 (1917) 年6月29日の佐伯新聞記事が要約されている。それによると、この亜砒酸工場は宮城正一が大正4 (1915) 年4月に最初に人家から遠い苦木に建設したのだが、鉱石輸送に不便なので同年8月、農家に近い鳥越に移転して操業を始めた。「ところが農作物に被害が出て、工場立退きを迫られ」「欧州大戦勃発の影響で、亜砒酸鉱業は活況を呈して、会社としても工場の拡張を迫られたので、製薬工場を再び苦木に移し、そして農作物の被害補償として金百円を農民に支払って、一応解決した」^④というのである。

佐伯には1910年代の中ごろ、木浦鉱山などから運んできた粗製の亜砒酸を精製する工場が建設され、工場周辺の農地に煙害をひきおこしたことで、農作物被害の補償金100円を払って、民家から離れた苦木という場所に引っ越した。煙害の起きた鳥越に住んでいて、当時を憶えていた人に1976年に会ったとき、その人は宮城のことを「九州の亜砒酸の元祖」と言った^⑤。

土呂久では、亜砒酸の製造が始まったのは大正9 (1920) 年6月で、亜砒焼きを始めたのは「大分県の佐伯から来た宮城正一」と言われてきた。佐伯市史は、その人物が土呂久に現われる前に、佐伯で亜砒酸工場を経営して煙害をおこし賠償金を払っていたことを記録していた。土呂久の砒素公害は、祖母・傾・大崩山系の地質と鉱山の歴史に深く結びついて起こったのである。

II章 土呂久の歴史と民俗

2-1 とろくの語源

“とろく”とは珍しい地名である。弥生遺跡で有名な静岡市の「登呂(とろ)」、川下りの観光名所になっている紀伊半島の「瀨八丁(どろはつちよう)」や秩父の「長瀨(ながとろ)」、2018年の冬季オリンピックのカーリングで名前をさせた北海道の「常呂(とろ)町」、高千穂町から約50キロ下流の延岡市に「土々呂(とろ)」というように似た地名は各地にある。しかし、“とろく”は少なく、熊本市内に鹿が渡ると書く「渡鹿」、対馬に「トロク崎」を見つけるくらいである。

“とろく”を「土呂久」とする表記が一般化したのは1930年代になってからのことで、それ以前は「土路久」「外禄」「外録」という字がよく使われていた。慶長14(1609)年におこなわれた検地の台帳は、現在の土呂久を4つの門に分けて、その中の一つを「猪鹿門」と記載している。いま土呂久は「惣見」「畑中」「南」の3つの組に分かれているが、猪鹿門がだいたい惣見組と一致することから、惣見組がもともとの“とろく”だったと思われる。本稿では、引用文中の“とろく”は原文通りに記載するが、本文ではすべて「土呂久」に統一する。

“とろく”の語源に関して確定した説はない。古語辞典で“とろく”を引くと、『古今和歌集』の転奥の方。底の方。辺地^⑥と説明してあることから、「とほく(遠奥)」の意味をもっているとする説がある一方で、土呂久には「むかし銀山として栄えていたところ、鉱山技術の指導に来ていたポルトガル人の名前がヨセフ・トロフだったので、トロフがなまって“とろく”の地名になった」という伝承が語られてきた^⑦。

2-2 落人伝説の里

土呂久35世帯のうち8割が佐藤の姓なので、お互いに姓ではなくて名前か屋号で呼び合っている。佐藤姓の由来は「佐藤道元の末裔だからだ」と言われてきた。道元は幼名を忠治(ただはる)といい、父は源義経の四天王のひとり佐藤忠信で、忠信が京都で源頼朝の家来によって討たれたあと、家臣に守られて九州山地の山奥に逃げ延びた。西川功著「高千穂太平記」は、「系図によつては、忠治の子兵庫允基信が臼杵郡に入り、上野村秋原に住み、後岩戸の荒谷に移り、更に西の内に移ったと言う説もある」^⑧と紹介している。忠治の子が移り住んだと言われる荒谷は、土呂久の畑中組にある小字で、ここには「道元屋敷跡」と伝えられる場所があり、源氏が氏神として敬ってきた八幡社が建っている。土呂久は、「祖先は源義経の忠臣佐藤忠信で、忠信の死後、その子孫が京都から逃げ延びて隠れ住んだ」という落人伝説をもつ集落なのだ。

2-3 修験の道場

1 やんぼし様の墓

土呂久には「やんぼし様の墓」と呼ばれる石の塚が2基ある。「歯の神様」「目の神様」と言い伝えられ、昔は、目をわずらったり虫歯が痛んだりしたときに、線香をたいて焼酎を供えた。向土呂久の^{むかいとろく}こんもりした茂みにある「やんぼし様の墓」には、「奉納 三部妙典 文政二年卯七月 施主 力蔵」と彫ってある。やんぼしとは山伏(修験者)のことで、石の塚は墓ではなくて、修験者が土呂久の谷で修行を終えたあと、経を納めた経塚だと思われる。

高千穂町史の「高千穂地方鉱山開発年表」に、享保16(1731)年に「土呂久鉱山で金山祈禱をおこなう」^⑨とあるが、このときに金山繁盛のための祈禱をしたのは修験者だったと考えられる。修験者は、鉱山で繁栄のための祈禱をただだけでなく、鉱山を発見し採

掘する役割も果たした。井上鋭夫著「山の民・川の民」に解説を書いた石井進は「戦国大名による大規模な鉾山経営が行われはじめる以前、鉾山の採取・経営にあたっていたのは『法印さま』とよばれる修験者・山伏の家だったようである。けわしい山々をわたり歩いて修行を積み、靈力をえて民衆にのぞんだ修験者たちは、また山中から聖なる金属類を採取しうる技術者でもあったらしい」^⑩と述べている。

山岳の靈力を身につけることを願って、山にこもって修行した修験者は、山の植生、生態、地質、天体などに通じていた。鉾脈を見つけて掘削するのを特技のひとつとした。修験の道場だった土呂久の谷で、最初に鉾石を掘り出したのが修験者であった可能性は高い。

2 薬師堂

「母屋」という屋号の農家に、表面に「奉施入東林寺薬師瑠璃光如来御宝前」と「日向州高知尾郷折原村居住国政敬白」、裏面に「応永十九年壬辰九月念九日」と「願主 八郎 三郎」とタガネで銘を彫った鰐口が保管されている。また庭の隅にはお堂があつて、中に薬師如来、日光菩薩、月光菩薩、12神将の15体の仏像がぎゅうぎゅう詰めに納まっている。堂の脇には、苔むした直方体、三角柱、壺、笠、半球の形の石が置いてあり、組み立ててみると8基の五輪塔になった。母屋の南に「堂屋敷」と呼ばれる場所がある。おそらく、そこに600年以上昔の応永年間、薬師如来を本尊とする東林寺という寺があり、五輪塔が建っていたのだと推測される。

鰐口の裏面の字は表面の字に比べると、明らかに稚拙で、彫った時期も人物もちがう。母屋の佐藤富貴男さんに話を聞くと、「折原の古い家である『先』の八郎と三郎が戦に行くとき、勝ったら12の仏像をつくってさしあげる、と薬師さんに願をかけた。戦に勝って戻ってきたので、約束の通り、仏像を自分で彫って奉納した」と

聞かせてくれた。富貴男さんがいう12の仏像とは12神将のことだ。以前、土呂久の南組を南北2つの小組に分けて、北の小組を折原、南の小組を南と呼んでいた。その折原に住んでいた国政という人物が、応永19（1412）年に東林寺にまつてあつた薬師如来に鰐口を奉納し、それから後、同じ村の八郎と三郎が戦に行くときに願をかけ、願がかなつたお札に薬師如来の守り神である12神将を寄進したということのようだ。

いまは所在不明だが、「母屋」には永享8（1436）年の銘がはいった懸仏形式の御正体もあつた。高千穂と阿蘇の学術報告書は、この御正体のことを「径七寸一分余、木造漆箔で御正躰に光背を浮出している。光背の紋様は美しい花模様であるのも珍しい。（表に）熊野本宮、（裏に）永享八年丙辰六月一日、と漆書銘がある」^⑪と紹介している。御正体は、修験者が礼拝の対象にしたものであり、そこに熊野本宮と書いてあつたことは、土呂久と熊野修験との関係を示している。

土呂久の西に標高1200メートルの四季見原（以前は櫛原と表記）という見晴らしのよい高台がある。小手川善次郎著「高千穂神楽」に「修験者の本院である祖母山の櫛原東福寺36坊の遺跡もあつて、これも鎌倉初期のものであろう」^⑫と書いているように、鎌倉時代に、櫛原には東福寺という修験の本院があつて、その周辺に修験者が巡拝する36の寺院があつたのだ。土呂久の東林寺は、その中の1院ではなかつただろうか。

東林寺は明治初めの「廃仏毀釈」で壊されて、五輪塔はばらばらにされ、壺や笠や半球の形をした石が田畑を支える石垣に使われた。このとき、15体の仏像は母屋の押し入れにかくまわれて難をのがれ、太平洋戦争が終わったあと、母屋の庭に建てられたお堂で日の目を見たのである。

土呂久に関係する古文書をひもとき、語り継がれてきた伝承に耳

を傾けると、路傍や庭の片隅にまつられている神仏が、興味深い歴史を秘めていることがわかる。

3 庵婆嶽（おぼだけ）神社

土呂久の南組の路傍に「庵婆嶽神社」という難しい字の額のかかったお堂がある。土呂久の人たちは「おぼだけ」とはいわずに「おぼ宮様」とか「うば宮様」と呼んでいる。この神社に秘められた歴史は、拙著「浄土むら土呂久―文明といのちの史記」（筑摩書房）P 28〜41に詳しく書いた。

もともと「おば」も「うば」も、神聖な山の水の番をした神女のことだ。初めは神女をまつっていた神社が、豊玉毘売（とよたまひめ）と日子穗々出見（ひこほほでみ）をまつる神社に変わり、江戸時代に祖母山の外宮八社（八方八王神）の一つとされて、土呂久の折原に建っていたことから「折原祖母宮」と呼ばれた。延享4（1747）年の岩戸村神社境内書上帳⑩をみると、「土路久村之内折原村 祖母大明神」には、縦32間（約60メートル）、横26間（約47メートル）の境内に1間（1・8メートル）四方の本殿が建ち、9月13日の祭礼には神楽が舞われていたこと



【八方八王神所在地図】

がわかる。当時は、現在のように道沿いではなく、もっと高い場所ので広い境内をもって建っていた。現在地に移ってから、祖母宮が庵婆嶽と命名されたのだが、この字をあてたのは、梵語や真言に通じた密教関係者であろう。

土呂久に修験道とのつながりを示す神社やお堂が残っているのは、ここが古祖母山に登る険しい谷だったからだ。その土地で、山中から聖なる金属類を採取しうる技術者」だった修験者は、銀を産する鉱脈を見つけたと思われる。土呂久には、そのあとを引き継いで、銀山を開発して大金持ちになった商人にまつわる民話が伝わってきた。

2-4 西国一の長者をつんだ銀山

1 民話「夢買い山弥」

柳田国男の「日本の昔話」に、日向西臼杵郡で採集された「外録」という金山」発見に関する民話「夢を買った三弥大尽」が収録されている。ここに収録された話は、土呂久で語られてきた話とやや内容が異なるので、土呂久で語られてきた話の方を紹介する。

「むかし、豊後の府内（大分）に山弥という商人が住んでおった。行商の途中、峠で出会った男と世間話をしておるうちに、眠った男の鼻からハチがでてきて、遠くの山へ飛んでいった。しばらくして戻ってきたハチの足に銀の粉がついておる。ハチが鼻の中に返っていくと、目をさました男が『大きな岩かげにまばゆいばかりに銀が輝いておる夢を見た』と言った。山弥はポンと手をうつと、『ぜひわしに、その夢を売ってくれ』と頼んで、行商の品物を全部渡し、代わりに夢の中で見たという場所を聞いた。来る日も来る日も山を歩き、その場所を見つけると、ツルを打ち込んで豊かな銀の鉱脈を掘りあてた。山弥は西国一の長者となり、土呂久から府内まで千両箱を並べ、その上を跳びながら銀山通いをつづけたげな」

ここまでは、夢を買って財宝を探し当てるといふ致福譚なのだが、土呂久の民話はこのでは終わらず、突然、次のような没落譚に変わる。

「山弥が府内に建てた豪邸は、天井がギヤマン張りで、その上水を張り、色とりどりの金魚を泳がせておった。ある日、殿様がやってきた。山弥は珍しい品々を見せたあと、殿様をギヤマン天井の部屋に案内し、ごろっと仰向けに寝ころがったかと思うと、足を高く上げて金魚を指して、殿様に説明を始めた。『無礼者め！』。山弥の態度に怒った殿様は、山弥の財産をとりあげて、四いとこまで一族をみな打ち首にしてもたげな。それから、鉾山で鉾石を運ぶときは『ヨイトコサンヤ』の掛け声が聞かれるようになった」

山弥が銀山を開発して長者になった致福譚が、財産を没収されて一族が殺されるといふ没落譚に転じたのは、この民話の背景に、歴史的な事実が隠されていたからだ。

2 実在した守田三弥

大分県庁に近い大分市大手町に「山弥長者屋敷跡」という史蹟があり、大分市史は、守田三弥之助氏定という人物が、日向の銀山を経営して大富豪になった、と記載している。その根拠の一つが、福岡藩の儒学者貝原益軒が元禄7（1694）年に著した「豊国紀行」で、そこには「先年府内に日根野織部殿在城の時、彼町に古田三弥と云商あり。日向の銀山にて銀を多く取て大富人となり府内に家宅を作る。其家大にして美麗なり。かやうの富人は諸国にまれ也。いささか城主の氣に背く事ありてころされ、其妻子一族ことごとく刑にあふ」（筑紫豊亨）と書き残されている。

また同時代の作家井原西鶴の「日本永代蔵」に、三弥をモデルにした「国に移して風呂釜の大臣」という小説が収録されている。菜種の栽培で大金持ちになった万屋三弥は、京都見物にでかけて享楽

を知り、毎日、京都の音羽の滝の水を府内まで船で運んで風呂の湯にするなど、贅沢の限りを尽くして破産したという話である。蓄財の理由が鉾山経営ではなくて新田開発になっていること、没落の理由が藩主の怒りにふれたことではなくて放蕩によるものであることなど、明らかに創作なのだが、西鶴が大富豪となった府内の三弥を小説の主人公としたことは、三弥の成金と没落の話が広く関西地方にまで知られていたからであろう。

実在した守田三弥はいつの時代の人物だったのか。宮崎の民俗学者山口保明は、土呂久に伝わる伝承を大分に残る記録で裏付けながら「山弥の在世時代を天正12（1584）年から正保4（1647）年までの63年として間違いない」と⑭と述べている。守田三弥が土呂久銀山を経営したのは、17世紀の前半とみる事ができるのだ。

山弥が殺されるところまで、土呂久の歴史は伝承を主軸にしてつくられるしかないのだが、これ以降の歴史は、残されていた文書を軸に伝承で補っていくことになる。



【山弥長者屋敷跡案内掲示板】

第三章 土呂久鉾山史

3-1 江戸中期の煙害

守田三弥が1647年に刑死したあと、土呂久鉾山はいったん休山したとみられる。高千穂町の向山むかやまの庄屋が書き残した「珍書雜記」^⑤に、「明暦元年、岩戸土路久山初ル」とあることから、休山していた鉾山は明暦元（1655）年に再開されたことがわかる。同書は「承応3年、山裏登尾山初ル」と、その前年の承応3（1654）年に土呂久から東へ峠を越えた登尾鉾山で採掘が始まったことも書いていて、17世紀の中ごろは、岩戸村の土呂久と山裏村の登尾をふくむ一帯が鉾山として開発されていたことをうかがわせる。

1655年の再開から35年後の土呂久鉾山に関する興味深い古文書の記載がある。高千穂の庄屋矢津田家に残る「巖秘録」という文書は、元禄3（1690）年に「岩戸村煙痛漆木六拾八本六歩分漆老貫三百七拾貳匁指免候事」^⑥と、岩戸村の鉾山すなわち土呂久鉾山で、煙痛（煙害）によって漆の木の収穫が減り、減免措置がとられていたことを記している。郷土史家小手川善次郎が写筆した「岩戸村勘文帳」^⑦をみると、減免はその前後もおこなわれており、少なくとも貞享4（1687）年から元禄4（1691）年までつづき、被害は漆の実1貫372匁と決まっていた、減免された小物成の額は毎年、銀48匁29だったようである^⑧。

江戸時代中期、土呂久の山のあちこちにかね吹きの床屋が立ち並んで銀を精錬したとき、鉾石に含まれていた有害な鉾物が酸化して煙とともに飛び立って漆の木に害を起こしていたことを物語っている。

3-2 幕末の繁栄

19世紀に入ると、土呂久鉾山は延岡の内藤藩直営の银山となっ

て繁栄する。延岡市立図書館所蔵の石川恒太郎写「内藤家所蔵文書（二）旧延岡領鉾山沿革」には、土呂久银山について「弘化二年頃ヨリ安政三年頃迄 御手山。但嘉永五年ニハ江戸表ヨリ酒井五左衛門御雇入相成、其翌年殿様御検分迄之レアリ。引続五、六年間ハ盛大ナリシカ如シ」^⑨と、弘化2（1845）年から安政3（1856）年まで藩直営鉾山として銀の産出でにぎわったことを記している。

この時期の最大の出来事は、嘉永5（1852）年に延岡藩が江戸の酒井五左衛門を银山奉行として雇い、翌年11月に藩主内藤能登守政義がじきじきに土呂久银山を視察したことであった。岩戸の人馬や賄いなどを準備した永の内の庄屋土持信贇つちもちのぶよしが書いた日誌が、高千穂町史に引用されている^⑩。その記述をもとに、藩主の鉾山視察を再現してみると――。

11月26日午前6時に岩戸村岩神の本陣を籠でたつた能登守は、天岩戸神社に参詣して神楽を見て、王子権現の前で茶を飲んだあと、昼ごろ土呂久银山に着いた。昼食を終えると、大曾おぞから吹谷まで坑口や銀を精錬する床屋を順番に見て回った。延岡からのお付きの者が、银山の門内で藩主一行の賄いをしたので、银山の門の外の村方が気をつかうことはなかった。土持信贇や高千穂の人馬方は、村の農家に泊まった。

11月27日、银山に滞在した能登守は、惣見にある鶴亀敷と呼ばれていた坑内を視察した。（鶴亀敷は、現在の土呂久北端の民家よりさらに約300メートル上方にあった坑口。）そのあと、今回の視察に貢献した土持信贇ら3人に土産として銀5匁が渡され、3人はさらに、鉾山の賄所より酒5升と魚2尾ももらった。翌朝の出立時の人足440人が夕方までに到着したので、信贇は南、折原、畑中の農家に宿泊するように手配した。

11月28日、能登守一行は、昼ごろ土呂久银山をたち、天岩戸神社で休んで、午後5時に岩神の本陣に到着した。

このようにして銀山視察を終えた能登守一行は、29日午前6時に岩戸村岩神の本陣をたつて帰路につき、延岡城に戻ったのは12月1日だった。延岡から土呂久まで約60キロの山道を籠で往復する旅は、現代では想像できないほどの困難がともなつたであろう。それだけの苦勞をして土呂久銀山を視察するほど、江戸末期の延岡藩にとって銀の必要性は大きかつたのである。

しかし、延岡藩が期待するほど土呂久鉦山の銀の産出は多くなかつたようだ。能登守の視察から4年後の安政4(1857)年、土呂久銀山の所有は熊本の細川藩の手に移る。

3-3 渡り鉦夫の墓

土呂久には「女郎屋敷」「吹谷」「鍾かねの口(樋の口)」「富高屋」「町」「寺屋敷」「番所」など、鉦山に関連した地名が残っている。寺屋敷と呼ばれるのは、土呂久川にかかる惣見橋の南西の竹林あたりで、この一帯には銀山時代の墓が建つていた。風化した墓碑銘に目を凝らすと、江戸後期の鉦夫(金堀工)とその家族の墓であることがわかる。

寺屋敷の東には「金堀繁蔵墓 三十二才 嘉永七年二月十八日」「□□行蔵 嘉永七年二月十二日」「豊後□□□ 嘉永七年正月三日」「金堀工 俗名 幸平墓 行年四十五才 嘉永六年九月九日」「豫州新郡別子村 新蔵 安政二年六月二十三日」「伊豫国新郡 金堀寅市 嘉永七年七月□□」などと読める。寺屋敷の南には、明治以降の墓にまじつて「金堀豊作 妻 京 栄太郎 安政四年九月十八日」「本庄十日町 鳥原永右□□ 安政二年九月十四日」「川□町北方 □□□ 安政三年三月三日」「出羽金堀 柏木千代松 娘 あさの 年四才 文久三年三月二十二日」「佐伯 俗名十兵衛 五十才 安政六年十二月十日」「春中村 □□□□ 文久四年□□□□」などと刻んだ墓が傾いて残っている。

ここに埋葬されたのは、全国の鉦山を転々とした渡り鉦夫とその家族たちである。幕末に土呂久鉦山がにぎわつた時期、東北の出羽国、四国の伊予国新居郡、九州の佐伯などを出郷した鉦夫が、はるばる祖母・傾山系の谷間にまで足をのばしていたことを教えている。



【金堀繁蔵墓】

3-4 明治以降の土呂久鉦山

明治7(1874)年に宮崎県から地史編纂を委嘱され、日向をくまなく調査した元飢肥藩校振徳堂教授平部嶠南が著した「日向地誌」に、幕末から明治にかけての土呂久銀山のようにすが記してある。岩戸村の項で土呂久銀山に関して、「坑物発見ハ元和二年丙辰二起リ、其後屢廢シ屢興ス。嘉永五年壬子延岡藩主内藤氏吏ヲ着手セシムル。十年許引継ギ、熊本藩主細川氏再ヒ吏ヲ着手セシムル。五、六年ニシテ一時休廢セシカ、明治十二年巳卯四月鹿島士人長崎武一郎ト云者又復發起セリ。一ヶ年出来高未タ詳ナラス。其質極テ佳ナリト云」(句読点は筆者)②と紹介している。

宮崎県企画局が1955年に発行した「宮崎県経済史」の第36表明治2年白杵郡鉦山概況には、岩戸村の外録銀山は明治元

(1868)年7月熊本藩に掘削を任せ、との記載がある。また鹿児島鹿兒島郡山下町の長崎豊十郎と長崎武一郎が明治17(1884)年に作成した「宮崎県日向国臼杵郡岩戸村字向土呂久銀山ニ係ル取調書」^②には、「明治十二年四月、熊本県肥後国阿蘇郡津留村土族橋本猪十郎ヨリ譲り受ケノ事」と書いてあり、こうした記述から、明治初め、土呂久銀山は延岡藩から熊本藩の家臣の手に渡り、そのあと明治12(1879)年に、元鹿児島藩の家臣長崎豊三郎と武一郎の所有となつて採掘されたことがわかる。この取調書には、製鉱の方法は「石置シテ深サ凡ソ四尺、巾三尺四方ノ角ナル炉、吹方ハ、タタラ吹キ」だったと、江戸時代からの精錬法を紹介し、産出量として「鉱石ハ一匁、鉛三十五貫目、正銀ハ三百五十目ヲ得ベシ。即チ一分ノ割合ナリ」、行業損益として「一ヶ年ニ付諸入要費二千四百円、得ル所ノ産出正銀十三貫目、此ノ代価三千二百五十円、差引利益金ハ八百五十円也」と書いている。当時の1円を現在の3800円として計算すると、年間の収益は323万円だったことになる。土呂久鉱山の経営はそれほど魅力的ではなかったと思われる。

宮崎県統計書をみると、明治24(1891)年度に土呂久吹谷の外録鉱山(のちの採登第80号鉱区)では鉱種として銀、銅、鉛を登録しているが、鉱品の出来高は31貫(116キログラム)にすぎず、経営は細々としたものだった。その後、休山して採掘はおこなわれず、日本鉱業名鑑によれば、大正9(1920)年に鉱業権者の竹内令昨が金、銀、銅、亜鉛、鉛、砒の6つの鉱種を登録し、砒粗鉱5万1400貫(193万トン)を採掘したことになる。つまり、この年から砒素の鉱石の採掘が始まったのだが、ここには砒鉱を焼いて採取した亜砒酸の生産高の記載がない。土呂久鉱山における亜砒酸の生産高が記載されるのは、昭和8(1933)年に鉱業権者が変わってからである。このことは1920年から1932

年までは、亜砒酸は「鉱業」として生産されたのではなく、佐伯の亜砒酸工場のように、鉱山から砒鉱を買った者が「工業」製品としてつくっていたことを推測させる。

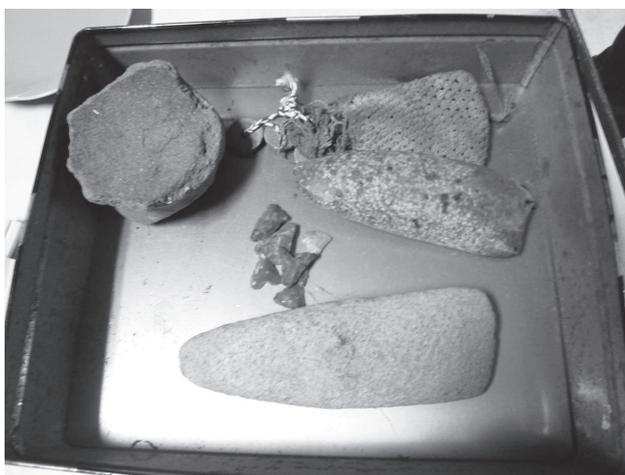
佐伯では、木浦鉱山などから遠路運んできた粗製の亜砒酸を工場で精製して純度の高い亜砒酸にしたのだが、土呂久では、鉱山で掘り出した硫砒鉄鉱を同じ敷地内にある粗製の亜砒焼き窯と精製窯で焼いて亜砒酸を採取した。土呂久鉱山一体になって亜砒酸製造をおこなったのに、鉱石の採掘は「鉱業」、亜砒酸の製造は「工業」として報告されたのだ。そんな形態をとったのは、鉱石の採掘者が地元岩戸の人物、亜砒酸の製造者が佐伯からきた人物だったからであろう。視野を祖母・傾・大崩山系に広げてみると、土呂久鉱山で亜砒酸製造が始まった時代背景が読めてくる。

IV章 土呂久の産業

4-1 狩猟採取

源義経の忠臣佐藤忠信の子孫が住みついたという落人伝説をもつ土呂久で、実際に人が住み始めたのはいつだったのか。土呂久の南5キロにある天岩戸神社の徴古館に展示されている土呂久出土の石器2点(石斧と石棒)が、その手がかりになるだろう。

土呂久の「母屋」の佐藤ツルさんは、石斧や黒曜石の鋳



【土呂久で出土した石器】

を手提げ袋に入れて保管していた。「子どもたちが遊びの道具にしていたので、とりあげて手提げ袋にしまっておいた。畑を掘ると、石器はいくらでもでてくる」とツルさんは話してくれた。鑑定してないので、いつの時代の物か定かではないが、土呂久では石器時代から人が暮らしていたのかもしれない。

そんな推測をさせるのは、宮崎県最古の遺跡、日之影町の出羽（いずるは）洞穴が土呂久から直線で約10キロ、現代人の足でも日帰りできるところにあるからだ。この洞穴には、約2万年前から8千年前まで人類が住んでいたとされ、出羽を根城とする石器時代人が土呂久の谷まで足をのびして狩猟採取をしていたことは十分にありえたことだ。

4-1-2 焼畑から常畑へ

土呂久では、焼畑のことを「やぼ作」と言い、太平洋戦争後の食糧難の時代にも山の斜面の藪を切って、作物を植えていた。狩猟採取のあと、土呂久で最初におこなわれた農業は焼畑だった。慶長14（1609）年に検地がおこなわれたときの記録「岩戸村竿帳」②をみると、土呂久は白石（現在の畑中）、猪鹿（惣見）、折原（南組の北半分）、南（南組の南半分）の4つの門に分かれていたことがわかる。耕作

耕作地 門	畠			山畠	切野	計
	上畠	中畠	下畠			
白石門	9畝10歩	2反7畝6歩	6反2畝28歩	1町7反4畝1歩	1反9畝5歩	2町9反2畝20歩
猪鹿門	2反3畝3歩	1反8畝20歩	2町4反7畝	1町9反9畝18歩	1町2反9畝5歩	6町1反7畝16歩
折原門	1反2畝	5反1畝14歩	8反2畝24歩	1町1反4畝5歩	1反9畝	2町7反9畝13歩
南門	9畝10歩	3反5畝27歩	2反9畝	6反1畝20歩	1反5畝	1町5反27歩
合計	5反3畝23歩	1町3反3畝7歩	4町2反1畝22歩	5町4反9畝14歩	1町8反2畝10歩	13町4反16歩
	6町8畝22歩					

【岩戸村竿帳をもとに作成した土呂久の耕作面積】

地は畠（常畑・上・中・下に等級付け）と山畠（焼畑）と切野（カヤ場）に分類され、地籍ごとの面積が記載されている。岩戸村竿帳をもとに、門ごとに面積を集計したのが表である。17世紀の初めには、常畑が焼畑よりやや広く、まだ水田は開かれていなかった。

4-1-3 水田の開発

1 土呂久で最古の水田

土呂久で最古の水田は、畑中の谷から土呂久川に流れ込む水を引いて、土呂久川沿いの「田久保」につくった田である。記録に残っているものでは、享保17（1732）年の検地帳に、白石門の「たて屋の南」「川むこ」「家ノ前」の3か所に合わせて9畝25歩（約100平方メートル）の水田の記載がある。その後、開田が進み、藤寺非宝著「岩戸村田成開発史」によると、140年後の明治4（1871）年、土呂久内の水田は5反7畝4歩（約5600平方メートル）に増えている。これらの田は、沢の水や湧水をつかったものだ。

2 土呂久川からの水路開削

古祖母山麓の岩戸地区は、深い峡谷をつくって川が流れており、大規模に開田するためには、標高の高いところから用水を引いてくる必要があった。最初に水路開削の調査をしたのは上寺の農民で、「岩戸村田成開発史」は「土呂久用水最初の見立は文政12（1829）年正月で、本村用水路として測量は最も古かった」②と書いている。この調査は、土呂久の「樋ノ口下」を水源に想定しておこなわれたが、工事が困難なことがわかって、天保6（1835）年に「トロク井手口鶴ノ脇」に水源を変更して調査をやり直している。現在は上寺用水と呼ばれている土呂久用水の取水口は、最終的には「惣見」に決まり、文久元（1861）年から文久3（1863）年8月まで2年8か月かけて、惣見から上寺まで130余町（約

14キロ)の用水掘削工事がおこなわれた。上寺地区に建っている「土路久水神石銘」に、「抑此用水祖母嶽南面之富麓門惣見ヨリ五ヶ村門迄百三拾余丁。其中、岩下東ヨリ西荒谷エ堀貫八拾間。去ル文久二壬戌七月ヨリ元治元甲子七月荒谷へ堀貫通水成就。同年見分有。辛酉ヨリ文久三癸亥四月五カ村堀通」と彫つてあるように、この用水を完成させるには、岩下東と西荒谷の間のトンネル80間(144メートル)をぬかねばならなかった。この難工事を成功させたのは、ぬき掘り熊五郎という人物で、そのときのトンネル工事の設計図が残っている。

上寺用水が1829年の調査開始から1863年の完成まで34年かかった間に、一足早く開通したのが東岸寺用水である。土呂久の南4キロにある高台の東岸寺では、谷底の土呂久川の水を運び上げて暮らしていた。大火で集落をほぼ全焼させたあと、水の必要性を痛感して、安政2(1855)年に総出で233日間汗を流し、土呂久の「駄渡瀬」から東岸寺の「上之地境」まで5・2キロの用水路を掘り通した。開通したときの喜びを岩戸村庄屋御用日記は、次のように記している²⁵⁾。

「今日、四ツ頃水流れ始め候処、暮六ツ頃東岸寺へ水流着申候。二月九日より今日迄二百三十三日にて水流着、井手下式拾式軒老若男女井手端に立出で歓びの声暫らく鳴りも不止。大乘院(黒原、山伏)相招即刻水神祭御神酒上致し、夜半頃東岸寺出立帰舎」

土呂久の人々は、土呂久から東岸寺まで用水を掘る大仕事を「どうして東岸寺まで水が行こか」と笑いながら見ていた²⁶⁾。しかし、実際に用水がぬけて広い田が開かれ、水稲が育つのを見ると、自分たちも沢の水や湧水に頼る狭い田ではなく、川の水を使う広い田が欲しくなった。

3 水利権裁判

土呂久南組の唵婆嶽神社の北側にある田んぼの畔に「明治十二年巳卯四月十日 新開田□□間 新開主 佐藤辰平」と彫つた水神石が建っている。「辰平じいさんが田を開いた記念に建てた。1反2畝(約1200平方メートル)の田を、機械があるわけじゃなし、自分の手だけで、竹モッコで石を引いて開いた。水は塩井元の湧き水を引いた」と、孫の全作が誇らしげに話してくれた。明治12(1879)年当時は、南組を通じて流れる東岸寺用水の水を「土呂久の農家は用水を開くのに協力せんかったから」という理由で、利用することができなかつたのである。用水の水利権を買って開田できるようになったのは、大正後期のことだった²⁶⁾。

上寺用水でも、取水口近くの人たちが土呂久川の水を使って稲作を始めようとしたところ、上寺の農民から「水利権の侵害だ」と反対された。土呂久川の水を使って水田を開けるのは、権利をもってある上寺の農家だけで、土呂久の農家はたとえ目の前を流れる水であつても使うことができないと言われたのだ。惣見組の小笠原利四郎と佐藤為三郎の2人の青年が、土呂久川の水で水稲耕作をおこなうことを求めて裁判に訴え、宮崎地裁で有利な判決を勝ち取った。驚いた上寺の用水組合が長崎控訴院にもちこんで、最後は1町5反の開田を認める和解で終結した²⁷⁾。

惣見組で、焼畑に育つ陸稲から川の水を使った水稲への転換が本格的に進むのは、水利権裁判で和解した明治の半ばを過ぎてからのことだった。

4 モカさんの大石垣

土呂久の急な斜面に田畑をつくるには、山肌ところがる大岩を砕いて、小さくした石で石垣を築き、その上を平らにならす必要があつた。「岩戸村田成開発史」は、明治の終わりに土呂久の開田に力を

注いだ女性（佐藤モカ）のことを紹介している。

「彼女は性質極めて勝気で所謂男勝りであった。幼児より最も好むものは、女に似合はしからざる石垣築きであった。頭をばいっも手拭で徳利包みにして、キリッといでたち、夜となく昼となくその近くの石原同然の原野を開墾した。（略）驚かされることは、どうにも始末のつかぬ大石をば女の身を以てこれを玄翁でもつてたきき壊したものであった。先ず大石の下に穴を掘り、それに若竹等を沢山つめ込んで火を焚き、ウンと熱した時、上から玄翁を参らせた。所が石を熱しめることは寒中に限るので昼は薪を集め夜は徹夜しながら火を焚き、その暖かみでうたたねをしたといふ。大正元年11月15日81歳の高齢を以て念仏もろとも大往生を遂げたが、モカ女の信仰とその大事業は今尚世人の耳に残って居ることで、実際に見なければ合点の行かぬ程の大石垣である」^②

同書によると、モカと夫歳松で開いた田13枚2反5畝（2575平方メートル）、畑16枚1町1反2畝（1・1ヘクタール）、田畑を支える石垣は約1000坪（3300平方メートル）におよぶ。その中のもっとも大きな石垣を「モカさんの大石垣」と呼ぶ。この大石垣に支えられた水田は、鉾山が規模を拡大するときに買収される



【モカさんの大石垣】

と、作物を育てる農地ではなく、鉾山の廃棄物の捨て場になり果てた。

4-4 畜産の伝統

土呂久は、空気も水も飼料も気候も畜産に適している。集落よりかなり高いところに土呂久平という場所があり、江戸時代に放牧場が開かれて、明治中期以降、岩戸だけでなく高千穂のいろいろな地域から牛を連れて来て放すようになった。

池田牧然獣医が大正14（1925）年に書いた「岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜砒酸鉾山ヲ見テ」^②は、この放牧場のことを「旧藩時代岩戸

庄ノ牛馬ヲ混牧シタガ、明治初年頃カラ牛ノ放牧ニ改メ、壮幼牛ヲ毎年百余頭宛放牧シタモノデアル。然ルニ明治中年頃、土呂久部落有放牧場トシテ、其ノ面積約二百町歩ノ主要ナル区域ニ土柵ヲ、森林界ニ木柵ヲ繞ラシ、稍々完備シタ放牧場トナシ、七折、高千穂、上野方面ノ畜牛ヲモ収容スル事ニシタガ、其成績ガ誠ニ良好デ、五月初旬ニ入場セシメテ十月下旬ニ退場セシムル時ハ、殆ンド入場當時ノ影ヲ止メ又位良ク成長肥満シテ、一般畜主ノ満足ヲ得タモノデアルガ……」（句読点筆者）と紹介している。



【現在の土呂久畜産農家】

池田牧然の文書によると、土呂久の農家が飼っている馬は明治30（1897）年ごろから、「土呂久馬（外禄馬）」の名前で県内外の商人の間で知られるようになった。「土呂久ノ先覚者ガ『アラブ雑種』ノ種牡馬桔梗野号ヲ郡ヨリ貰ヒ受ケ、之デ一般馬匹ノ体型ヲ整理シ、其レニ明治40年頃『トロツター雑種』ノ種牡馬ヲ入レ、幅員アル短肢小格ノ馬ヲ作ル事ニ努メタカラデアル。ソレデ県内外ノ商人ハ、土呂久馬ハ強クテ後デ体格ガ出来テ使役一等ト評判シタモノデアル」。土呂久馬は、がっちりした体格で力が強く、農耕や運搬に最適と評判はよかった。それを裏付けるように、惣見組の民家には、明治43（1910）年から大正5（1916）年にかけて佐藤熊彦所有の牝馬下山号が、馬政長官から産馬奨励金を8回合計440円授与された証明書も残っていた。

池田牧然は、大正中期に土呂久44戸で飼育している馬は32頭、牛が55頭と記し、「毎年ノ生産牘ハ立派デ品評会デモ優勝シ、糶市ノ価格モ郡ノ一位ヲ占ムルモノガ多イ。候補種牝牛ヤ候補種牝牛ハ、大概此部落生産ノモノカ、又ハ、其系統ニ連ルモノガ多イト云テモ宜イ位デアル。何様土呂久ハ、畜産ノ歴史モ古イガ、畜産地ト指ヲ屈シテモ辱カシカラザルモノデアル」と、土呂久が古い歴史をもつ屈指の畜産地であると述べている。

4-5 山の自然とともに

大正中期の換金作物として、蜂蜜、シイタケ、カイコ、タバコ、杉、竹などがあつた。池田牧然の文書には、蜜蜂について「地勢ノ関係等良イノデアラウ。在来種ノ蜜蜂ガ良ク巢ニ入ルノデ、各戸蜜蜂ヲ養ナツテ居ナイモノハ殆ンド居ナイ。多ク持ツテ居ルモノハ、百箱以上モ持ツテ居テ、部落デ蜜ノ総生産高ハ実ニ大シタ者。其量ハ判然セヌガ、一ケ年ノ蜜代デ煎子、鯉節、砂糖、油代ハ充分ニアツタト云フテ居ル」と書いている。当時の山村では、現金で購入しなけ

ればならなかつたいりこ、鯉節、砂糖、油代が1年間の蜂蜜の販売収入で十分にまかなえたというのだ。シイタケについては「同部落ノ主要物産デ、先ヅ椎茸ノ生産高デ、納税其他農家ニ必要ノ経費ハ、之デ支払ツテ居ルト云フテモ良イ位ダト云ツテ居ル」と、シイタケの売上金で納税その他の必要経費を支払っていたという村人の話を紹介して、「牛馬ノ売上代トカ農産品ノ売上金ハ貯ヘトナツタラシイ」と書いている。池田牧然の記録から、鉾山で亜砒焼きが始まる前、山の自然と共生する豊かだった土呂久の暮らしを想像することができる。その時期に、土呂久では稀有の自治組織が機能して、山村の共同体の維持に努めていた。

V章 解体期の共同体

5-1 和合会創設

土呂久に和合会がつくられたのは明治23（1890）年のことだった。和合会は昭和40（1965）年に行政の末端組織である公民館と合併したので、現在、その組織はない。土呂久公民館の書記のもとに和合会の議事録が保管されていたころ、桐の箱におさめられた何冊もの議事録を読ませてもらうことができた。

その中の一冊に、表紙に「和合會盟約條例」と書かれた文書があつた。表紙を開けると、「本村大字岩戸門ニ於テ創立スル和合會盟約條例ヲ認定ス」とあり、「明治二十三年九月十三日 西臼杵郡岩戸村長 土持信徹」という署名と、その上に岩戸村長の公印が押してあつた。和合会は、村長が認定するという公的な手続きを経て創設された組織だったので。次を開くと、変体仮名で「人奈連哉人奈連哉誠の人奈連哉」と、姿や形の美しさではなく身業（行動）、口業（言葉）、意業（意識）の清く正しい誠の人になれという教えを説いた前書き

がでてくる。その最後に「編者 佐藤善縁 識ス」とあって、和合会盟約条例を編集した佐藤善縁という人物が、この前書きを記したことがわかる。

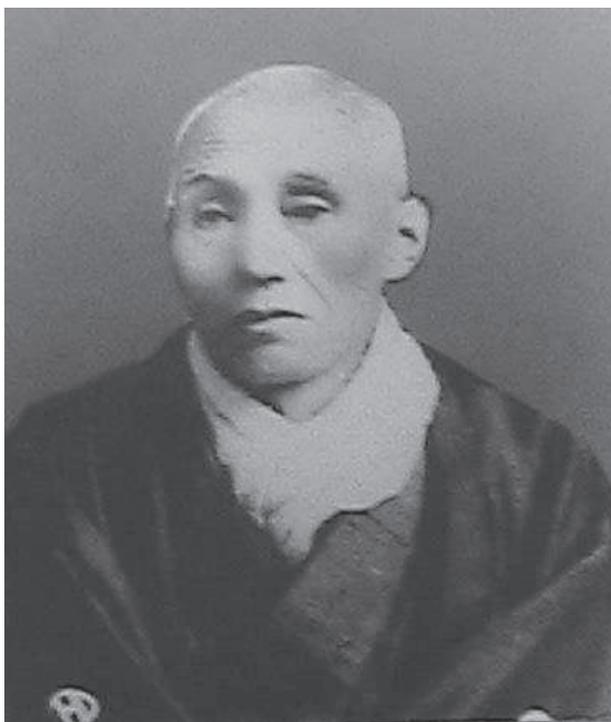
公的な格式を踏んで創設された和合会は、何を目的とした組織だったのか。条例第2条に「本会盟約公衆ノ財産ハ一般盟約公衆へ融通シ互ニ公正ノ利ヲ材モノトス」、第3条に「盟約公衆ニ限り税金滞納且身代限り等ノ事件ニハ本会ヨリ救助シ目悪キ姿状ヲ他人ニ頭サルコト」、第7条に「本会公衆ニ限り税金其他生死等急迫ノ際ハ抵当無シ貸与ス」、第13条に「本会公衆ニ限り猥ニ抵当品ヲ他村ニ書込ムコトヲ禁ス」とあることから、土呂久の裕福な農家から基金を集め、無担保低利で融資し、税金滞納や破産の窮地の者を救おうとする組織だったことがわかる。和合会創設の1890年は、前年秋の全国的凶作で米価が高騰、資本主義経済による恐慌的不況によって人々の生活が追いつめられた年だった。土呂久も深刻な生活苦に襲われたにちがいない。そんな時期に、土呂久の財布をひとつにして、土呂久内の土地が不在地主の手に渡らぬよう共同の力で守ろうとした。資本主義経済の全国的な浸透によって、農山村に確立していた共同体が解体されていく時期に、解体期の共同体を維持存続するためには、このような金融互助組織が必要だったと思われる。一種の金融機関だったから、その創設に村長の認定を必要としたのであろう。

5-1-2 創設者

和合会を創設した佐藤善縁は、どんな人物だったのか。1972年8月に土呂久の長老佐藤竹松から聞いた話が残っている。「和合会の創立者は佐藤善縁という坊さんだった。今の公民館長の佐藤福市さんの叔父さんで、生きていけば120歳くらい。土呂久を統一するには金融機関をつくらねばと考えたようだ。和合会の総会は、

始まる前に必ずお経を読み上げた。規約で、時間の励行、債権者が無理な利息を取り上げる場合は、中に立って弱い人を助けることなどを決めていた。もし犯罪をおかした人がおれば、名誉を守るために外に出さず、内輪でおさめるようにした。亜硫酸製造が始まる前までは、和合会はおおかたまとまっていたが、製造が始まってから利害の対立が起きて喧嘩会になり、最近壊滅した」^⑩

佐藤善縁は土呂久の「長石」で生まれ、岩戸にある浄土真宗泉福寺の伴僧となり、彦根で修業したあと土呂久に帰ってきた。貨幣経済が浸透する農山村で、高利貸から担保にした土地をとられる状況に心を痛め、集落の農地をよそ者にとられることのないように、彦根でみてきた金融機関を参考にして和合会を創設したのだ。



【和合会創設者：佐藤善縁】

5-3 自治組織に発展

金融互助組織として出発した和合会は、明治44（1911）年3月、「外録組合改良規約会」と合併する。規約会は明治34（1901）年につくられ、第2条に「本会ノ目的ハ、品行端正ヲ旨トシ、改良適進歩上総而諸般ノ整理改革ヲ計ニアリ」と定めているように、行事参加の際の時間順守、納税の義務履行など、近代化する社会の要請に応じて、罰則をもうけてまで土呂久地区住民に規律を身につけさせようとした組織だった。この合併によって、金融互助組織だった和合会は、重要事項を決議する立法、それを執行する行政、犯罪の捜査や処罰など司法の権限をもち、さらに農産物の共同購入や産業組合化を勧めたりする集落の自治組織へと発展した。

1965年に公民館に移行して忘れられかけていた和合会が、目の見たのは1971年11月のことだった。土呂久の子どもたちが通う岩戸小学校の齋藤正健教諭が、公民館書記の家を訪ねて、桐の箱におさめられていた議事録を手にした。齋藤の目は、大正12（1923）年5月25日に開かれた総会の議事に釘づけされた。

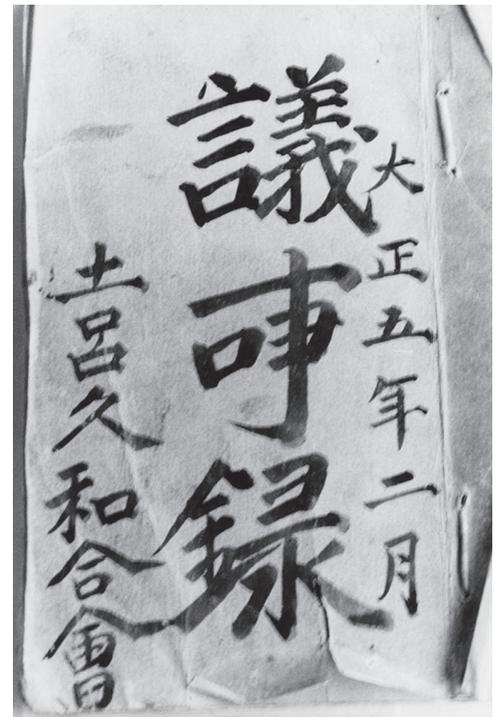
一、亜非酸害毒豫防法設備ニ関スル件

害毒豫防方トシテハ完全ナル設備ヲナシ事業ヲナサレン事会
員一同万乗一致ニテ当事務主任者へ願フ事

大正9（1920）年6月、土呂久鉦山で亜砒焼きが始まって3年後に、集落の自治組織である和合会が、亜砒酸製造による害毒の予防を鉦山事務所に願ひ出ることを決めたという記載である。山の自然と共生していた暮らしが、外から侵入してきた貨幣経済で壊れかけたのにつづいて、こんどは鉦山が生産する亜砒酸の毒に襲われようとしていた。和合会議事録は、砒素公害にあらがって共同体を守ろうとした住民の足跡を刻む重要な記録としてよみがえってきた。

《参考資料》

- ① 高千穂町史P582～583…1973年
- ② 宮崎県・宮崎県の地質と地下資源P47…1963年
- ③ 斧石林勝美先生遺稿P152…1960年
- ④ 佐伯市史P699…1974年
- ⑤ 鮫島ヤエの証言…土呂久図書館A12113のDSC02127
- ⑥ 古語辞典…角川書店
- ⑦ 日向日日新聞…続珍説地名考101…1958年8月14日
- ⑧ 西川功「高千穂太平記」P172、高千穂郷史同好会…1972年
- ⑨ 高千穂町史P583…1973年
- ⑩ 石井進「山の民・川の民」（井上鋭夫著）の解説P13…平凡社…1981年
- ⑪ 高千穂・阿蘇P441…神道文化会…1960年
- ⑫ 小手川善次郎「高千穂神楽」P28…1976年



【和合会議事録（表紙）】

- ⑬ 延享四丁卯年十月岩戸村神社書上帳…高千穂保存会編紀元二千六百年記念高千穂特別記録文獻資料(2)山口保明「山弥伝承について―ある一つの淵源―」P44…口承文芸研究第8号…1985年5月
- ⑭ 珍書雜記…高千穂町史年表P29…1972年
- ⑮ 宮崎日日新聞…1972年1月21日
- ⑯ 岩戸村勘文帳…小手川善次郎遺稿…土呂久図書館B1111のDSC09035
- ⑰ 土呂久図書館A117のDSC02031とDSC02033
- ⑱ 石川恒太郎写「内藤家所蔵文書(二) 旧延岡領鉦山沿革」P449…延岡市立図書館所蔵
- ⑲ 高千穂町史P589…1973年
- ⑳ 平部嶠南「日向地誌」(復刻版)P963…新潮社…1976年
- ㉑ 高千穂町史P590…1973年
- ㉒ 岩戸村竿帳…小手川善次郎遺稿…土呂久図書館B1111のDSC09048とDSC09054およびA116のDSC01734とDSC01739
- ㉓ 藤寺非宝「岩戸村田成開発史」P129
- ㉔ 藤寺非宝「岩戸村田成開発史」P80
- ㉕ 佐藤全作の証言…土呂久図書館A114のDSC01464とDSC01471
- ㉖ 上野登「明治の教訓を今訴訟に」…鉦毒17号…1976年10月
- ㉗ 藤寺非宝「岩戸村田成開発史」P30
- ㉘ 池田牧然「岩戸村土呂久放牧場及土呂久亜硫酸鉦山ヲ見テ」…岩戸村政永久史料…1925年4月
- ㉙ 佐藤竹松の証言…土呂久図書館A117のDSC09299

*土呂久図書館は、宮崎県高鍋町の野の花館にあつて、筆者が収集した文書を所蔵している。特定非営利活動法人アジア砒素ネットワークは、その文書を撮影してデジタル化し、宮崎市にある事務所のハードディスクに収納している。後ろに書いている整理番号で検索すると、その文書を見ることが出来る。

日本の宮崎牛を目指して

宮崎県立農業大学校

佐藤 登士夫

目次

- 一 第一一回全国和牛能力共進会「宮城大会」の概要
- 二 歴史と伝統の学校「宮崎県立高鍋農業高等学校」
- 三 畜産科学科の紹介
- 四 子牛の贈呈「みちみち五」号について
- 五 農業経営者育成を担う「明倫寮」
- 六 農業クラブ「肉用牛経営研究班」
- 七 高鍋農業高校の全共に向けた準備
- 八 児湯郡育成共進会グラウンドチャンピオン受賞
- 九 全共参加の成果
- 十 全共を終えて
- 十一 終わりに

一 第一一回全国和牛能力共進会「宮城大会」の概要

和牛の能力を競い合う全国和牛能力共進会が五年に一度開催されています。昨年度開催された宮城大会の概要は次のとおりです。

大会名称	第一一回全国和牛能力共進会宮城大会
主催	公益社団法人全国和牛登録協会
開催期間	平成二九年九月七日～九月一日
開催場所	種牛の部会場 仙台市「夢メッセみやぎ」 肉牛の部会場 仙台市「仙台市中央卸売市場食肉市場」
出品頭数	種牛の部 三三四頭 肉牛の部 一八三頭
開催テーマ	「高めよう生産力 伝えよう和牛力 明日へつなぐ和牛生産」 イベントテーマ 「感謝と美味しさ牛（ぎゅー）ツと込めて和牛の祭典二〇一七 「みやぎ」

今回は新たに、復興特別出品区「高校の部」が開催されました。その内容について、実施要項より抜粋します。

第一一回全国和牛能力共進会の付帯行事として、全国の農業高校から出品される区を設け、出品に向けた取り組みを通じて、わが国固有の肉専用種である和牛に対する理解を深め、和牛の将来を担う後継者の育成を図ることを目的として開催する。また、第一一回全国和牛能力共進会が東日本地域で開催されるにあたって、東日本大震災からの復興や明るい明日に向け、将来の担い手となる全国の農業高校生が一堂に会して、切磋琢磨し交流を深める様子を全国へ発信する。

「日時」

平成二九年九月七日（木） 一三時～一四時二〇分、一五時四〇分～一六時四〇分

「会場」

宮城県仙台市夢メッセみやぎ

「出品資格」

- ・自校で生産・飼育されている繁殖雌牛を出品する。
- ・出品時の生後月齢は、原則として全共の二区と三区に準ずる。（二四カ月～二〇カ月未満 生年月日 平成二八年一月八日～平成二八年七月七日）もの。

・出品牛の父牛は、道府県の改良方針に基づいた種雄牛であること。

「審査方法」

出品牛の審査序列と出品高校の取り組み発表の評価順位を合計し序列を決定する。

平成二七年三月のことでした。第一一回全国和牛能力共進会宮城県推進協議会会長平木場 宗一様より宮崎県立高鍋農業高等学校へ特別出品枠を頂きました。本校には平成一九年の宮崎県畜産共進会において、「みねこひめ三」号が見事グランドチャンピオンに輝いた経験があります。しかし、平成二二年に児湯地域を襲った口蹄疫により、三三五頭の豚・牛とともに殺処分となりました。「みねこひめ三」号の産みの親でもある都農町で繁殖経営をされている黒木さん宅も口蹄疫により全頭殺処分となったことを機会に、「宮崎牛の未来を若い人に託したい」という一心で本校にヘルパーとして通い、経験や技術を伝承してこられました。その黒木さんに「全共対

策アドバイザー」として協力をして頂き、口蹄疫からの復興を全国の方々に発信するという想いを伝えることを念頭に置きながら今回の全共に臨むことにしました。



復興特別出品区「高校の部」の参加校は次の一四校です。

岩手県立盛岡農業高等学校
 福島県立福島明成高等学校
 群馬県立中之条高等学校
 京都府立農芸高等学校
 鳥取県立倉吉農業高等学校
 長崎県立北松農業高等学校
 宮崎県立高鍋農業高等学校

宮城県柴田農林高等学校
 栃木県立鹿沼南高等学校
 岐阜県立飛騨高山高等学校
 兵庫県立但馬農業高等学校
 岡山県立瀬戸南高等学校
 大分県立三重総合高等学校久住校
 鹿児島県立市来農芸高等学校

そして、わが高鍋農業高校から出品した牛は次のとおりです。

名号 「もみひめ」号
 生年月日 平成二八年六月二三日
 個体式別番号 一四〇六〇一五五七五―五
 血統 (父) 秀正実 (祖父) 安重守 (曾祖父) 忠富士



二 歴史と伝統の学校「宮崎県立高鍋農業高等学校」

高鍋農業高等学校は、旧高鍋藩校「明倫堂」の教えを引き継ぎ、一五五年を迎える長い歴史と伝統を持つ農業高校です。学校は、舞鶴城の跡地にあり、お堀に囲まれた自然豊かな場所にあります。

平成二六年の学科改編により、園芸科学科（野菜、草花、果樹）、食品科学科（食品加工、乳製品加工）、フードビジネス科（六次産業、流通、販売）、畜産科学科（酪農、肉用牛、養豚）の四学科が設置されています。

昭和三九年に文部省指定自営者育成高等学校（現在は農業経営者育成高等学校）の指定を受け、農業経営者の育成を目的に、園芸科学科、畜産科学科は全員三年間「明倫寮」で寮生活を送ります。（食品科学科、フードビジネス科は希望入寮）



三 畜産科学科の紹介

畜産科学科は、乳牛、和牛、豚の飼育や畜産物の販売、畜産に関する基礎的な知識・技術について座学と実習を通して専門的に学習できる学科です。

養豚部門は、平成二八年、二九年と二年連続、都農町・ミヤチク都農工場に健康な肉豚を出荷した割合がずばぬけていたとして、県都農食肉衛生検査所から表彰を受けました。酪農部門は、平成三〇年四月に静岡県で開催された、第九回全日本ブラックアンドホワイトショウ「高校の部」において第二位を獲得しています。そのような、県内でもトップレベルの畜産を学べる農業高校です。

ところで、平成二二年に本県の児湯地域で発生した家畜伝染病「口蹄疫」により、宮崎県内では、二九万七八〇八頭の尊い家畜の命が犠牲になりました。当時、本校の舞鶴牧場では、生徒の立ち入りを禁止。消毒、飼養管理はすべて職員で対応していましたが、乳牛の搾乳中に水泡を確認。虚しく、本校でも口蹄疫が発生しました。殺処分の前日も、乳牛一頭の新たな命が誕生しました。しかし、平成二二年五月二五日、乳牛三二頭、肉用牛二二頭、豚二八一頭を殺処分しました。県内全域から生徒が入学しており、口蹄疫発生後は、寮から自宅に帰省することもできず、今まで優しく愛情を持って育ててきた家畜が殺処分されることは、心が痛いほど辛かったことだと思います。牧場から、家畜がいなくなり、生徒は実習をすることができず、家畜に触れたくても触れることができない辛い経験をしてきたと思います。

しかし、様々なご支援のお陰もあり、現在ではこのような大きな被害から復興してきました。



鎮魂碑の建立

日本のひなた
宮崎県

口蹄疫により殺処分され、埋却された後の畜産魂碑。



防疫措置を完了した畜舎

日本のひなた
宮崎県

口蹄疫で真っ白になった牛舎。



山形県米澤佐藤畜産より贈呈された子牛

日本のひなた
宮崎県

四 子牛の贈呈「みちみち五」号について

殺処分により、学校の舞鶴牧場から家畜が一頭もいなくなりましたが、山形県米沢市で、肥育経営をしていらつしやる、米澤佐藤畜産社長佐藤秀彌様より、雌子牛一頭を寄贈して頂きました。この子牛は口蹄疫終息後、児湯家畜市場で開催された初のセリ市で二六〇万円でセリ落とされたものです。佐藤様は、二ヶ月に一回開催される児湯地域から子牛を導入され、雌子牛を三五ヶ月間肥育し「鷹山牛」として販売されています。上杉鷹山公が縁で高鍋町と山形県米沢市は姉妹都市となっていることから、高鍋農業高校の生徒の為にという想いで寄贈されたと伺っております。

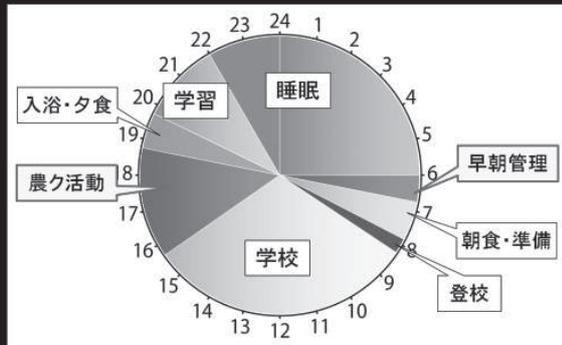
そのような中、今回、第一一回全国和牛能力共進会が東北で開催されたことは、深い縁を感じました。

五 農業経営者育成を担う「明倫寮」

校舎から少し離れた、高鍋の街が一望できる高台の上に、「明倫寮」があります。生徒は、この明倫寮にて生活を共にしています。普段は、朝六時に起床。前庭で全体点呼を受け、各部屋の清掃をします。居室は二人部屋で、学年の異なる生徒が同じ部屋で過ごします。清掃の後は、食事を摂り、七時を過ぎると畜産科学科の生徒は、朝の家畜の飼養管理で、舞鶴牧場へ向かいます。一時間程度の管理を終えてから、学校へ登校し、授業を受けます。

放課後の農業クラブ活動、部活動を終えると、一八時四五分に全員帰寮し、食事、入浴を済ませ、二〇時から二二時まで学習を行います。そして二二時には消灯になりますが、畜産科学科は、将来の畜産を担う人材育成を目的に夜の牛の分娩対応なども行います。

生徒の1日の流れ



六 農業クラブ「肉用牛経営研究班」

全国の農業高校生は、全員農業クラブ活動に取り組むことになっています。農業クラブは専門ごとに研究班があり、本校の畜産科学科肉用牛経営研究班には、一年生二二名・二年生一三名・三年生一二名が所属していました。

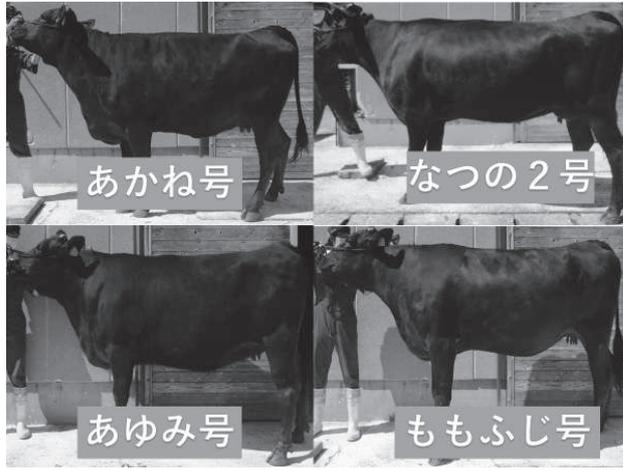
その農業クラブとは別に、部活動として「自主活動班」と呼ばれる肉用牛部に七名が所属しており、その七名の生徒を中心に全共に向けて取り組みました。



七 高鍋農業高校の全共に向けた準備

① 全共候補牛の誕生

平成二七年高鍋農業高校には、一三頭の母牛がいましたが、全共出品条件に見合った分娩が可能な母牛は四頭でした。そして、二頭の生年月日が合う雌子牛が誕生しました。



母牛名号	分娩日	子牛名号	血統
あかね	H28. 7.4	♂ 耕太郎	耕富士-勝平正-安平
なつの2	H28.3.22	♀ なつみひめ	美徳国-福之国-福桜
あゆみ	H28.6.18	♂ 純之介	美徳国-梅福6-福之国
ももふじ	H28.6.23	♀ ももみひめ	秀正実-安重守-忠富士



「なつみひめ」号



「ももみひめ」号

② エサ箱の改善

当時、牛舎は、エサ箱がブロックでできており、牛房の片隅に配置してあったため、エサを食べる際に牛が壁に寄りかかり、牛の立ち姿勢に影響することを全国和牛登録協会宮崎県支部の方に指摘されました。そこで、牛房の中心になるようにエサ箱を設置し直しました。



③ 飼養管理

牛の審査栄養度判定では牛の発育を左右する日頃の飼養管理が重要となります。その審査は、き甲・背・肋・腰角・臀・尾根部の触診と栄養度です。その栄養度を決める飼料は大きく二つに分けられます。

一つは粗飼料です。

粗飼料は、牛の腹作りにおいて重要であり、栄養価、品質においては特に大切です。粗飼料は、稲ワラ、オーツヘイ、イタリアン乾草、青刈り（トウモロコシ・エン麦・イタリアンライグラス*時期によって変わる）を吹き上げカッターで細断して給与しました。

もう一つは濃厚飼料です。

粗飼料の不足を補う、濃厚飼料は、子牛マニュアル飼養管理を参考にしながら、牛の状態に合わせて給与しました。

朝七時と夕方四時に給与を行いました。給与者と給与量を記録させることで、常に牛の状態を把握するという意識を身に付けさせました。熱があるのではないか、下痢をしていないか、脱水を起こしていないかなど、ちょっとした牛の変化に気づき、早目に処置、対応をすることが、発育に大きく影響してくるということを生徒は学んだと思っています。

④ 牛洗い・毛刈り・削蹄・引き運動

牛の産まれ持っている能力を十分に引き出す飼育者は牛の美点（特に優れている部分）を伸ばし、惜点（惜まれる部分）を少なくすることで「品位・資質」を作り上げます。生徒たちも優れた飼育者を目指して日々の管理に取り組みました。

ア、牛洗い

牛を一日一回洗いました。ホウキで汚れを落とし、石鹸を使い、ブラシで擦っていきます。洗ったら、水で流し、水をしっかりきりタオルで良く拭いて乾かします。最後に、ブラシで毛を起こしていきます。生徒は休日も休まずにこの作業を行いました。



イ、毛刈り

毛刈りは、牛の輪郭の鮮明さを出す技術です。バリカン、立ちバサミ、隙バサミを用いて毛刈りを行いました。大変難しかったため、アドバイザーの黒木さんから指導を頂きました。毛を切った後の牛を

頭に浮かべながら、毛を刈りますが、頭から前駆にかけての部分は特に高い技術が必要です。この毛刈りによって牛の体の移行、体紋まりを良く見せることができます。

ウ、削蹄

蹄を削る技術である削蹄は、牛を正しい肢勢にするために必要です。外向きに脚が開くと、肢の強さや、品位が下がるからです。削蹄を行うことで、体上線がまっすぐになり、体のバランスが良くなります。



エ、体位測定

管理の成果を客観的に把握するために、毎月一回、牛の体位測定を行いました。測定項目は、体高・十字部高・体長・胸囲・胸深・胸幅・尻長・腰角幅・かん幅・坐骨幅です。牛の発育の目安となる発育曲線の数値として体高一・五〇以上は優等賞の目安とする。厳しい全共の審査基準がありますので、生徒たちは発育の数値を目で確認すること、記録の重要性を感じたことと思います。



八 児湯郡育成共進会グランドチャンピオン受賞

平成二八年一〇月、児湯郡・西都市の和牛繁殖農家の母牛を評価する共進会が、新富町の児湯地域家畜市場にて、八年ぶりに開催されました。出品牛三六頭の中から、本校の一七ヵ月齢の「なつひめ一」号（父 勝平正 母の父 福之国）がグランドチャンピオンとなり県知事賞を受賞しました。生徒らにとっては全共を前に大きな弾みになりました。



九 全共参加の成果

① 関係機関との連携

全共に出品するにあたり、宮崎県畜産振興課、公益財団法人全国和牛登録協会宮崎県支部、児湯畜産連合会から、牧場に来て頂き、牛の管理、調教等について指導して頂きました。生徒は、普段学校で教職員から学んでいます。外部の方からご指導を頂くことで、農家と同じように学べる貴重な機会であったと思います。

また、高鍋町役場、JA児湯の方からも激励を頂いたり、河野知事にも取り組み発表についてご助言を頂くなど、まさにチーム宮崎としての参加であることを強く感じました。



② 猛暑対策

七月、八月と本県の夏は非常に暑い猛暑日が続きました。牛への「ストレス」を押さえ、牛への負担をかけないように、朝夕の涼しい時間帯に管理を行いました。朝五時過ぎから引き運動を行い、夕方六時頃に調教を行いました。生徒は一日も休まずに牛の管理に取り組みました。

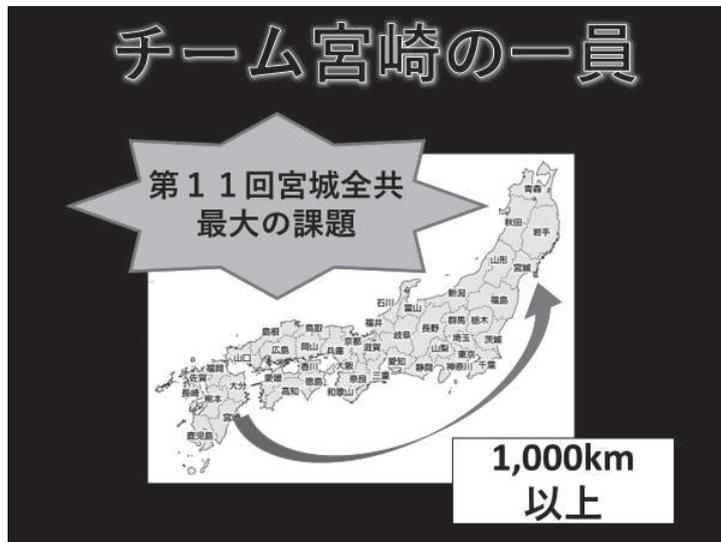


③ チーム宮崎の課題

全共会場は一七〇〇キロ離れた宮城県でしたので、輸送対策や水の確保という大きな課題がありました。本県は現地視察や輸送試験、水の確保のための対策をしてきました。全共三連覇に向けて牛のことを第一に考え、牛を万全にして勝負をするということを実感しま

した。

本番は九月とはいえ、気温が三〇℃近くまで上がりました。長距離輸送での暑さ、牛舎での暑さも考え、扇風機を配置するなどの工夫もありました。全国和牛登録協会宮崎県支部の長友局長が、「まずは、スタートラインに並ぶことが大切。」と常に言っておられました。出品した「ももみひめ」号は、宮城県に到着した際には、ほとんど疲れていませんでした。本当に宮崎県の全共に向けた準備の凄さを感じました。



④ 会場での飼養管理、牛洗い

全共会場に牛が到着し、牛に少しずつエサを給与しました。エサは通常やっている、オーツヘイやイタリアン乾草などを持っていき

ました。牛が、しっかりとエサを食べ、床に横になったときには本当に安心しました。定期的にNOSA Iの獣医の方に牛の様子を見て頂き心強く感じました。

会場には、牛洗い場が設置してありましたが、数が少ない為、一頭あたり一〇分間で洗わねばなりません。生徒は、みんなで協力して牛を洗い、自分の学校の牛を洗い終わったら、児湯地区の同じ農家の方の牛洗いを手伝っていました。

また他県の牛も牛を洗に行く際に、本県の牛舎の前を通りますが小さい石が落ちていたり、牛の蹄を傷つけてしまいますのでホウキを持って、空いている時間はキレイに清掃しました。本県は、牛舎のキレイさも日本一、マナーも日本一であることを確認できました。



⑤ 高校の部 オリエンテーション

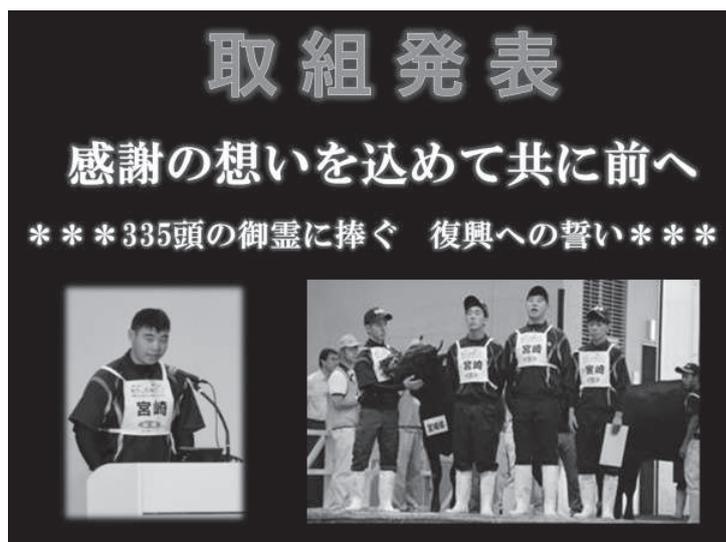
大会前日には、高校の部のオリエンテーションがありました。参加した農業高校の紹介、宮城県の高校生が作った「ズンダジェラト」のおもてなしもありました。

牛への志をもった全国各地の仲間が切磋琢磨して、地域の担い手となるために学び、その成果を全国の方に見て頂くという本当に素晴らしい大会にしたいという想いを感しました。



⑥ 高校の部 取り組み発表

出品牛の審査と同時に、取り組み発表がありました。当時畜産科学科三年の黒木唯登さん（現在、都農町で和牛繁殖を経営）が、「感謝の想いを込めて共に前へ〜三三五頭の御霊に捧ぐ復興への誓い〜」と題して発表をされました。黒木さんは、口蹄疫が本校で発生し家畜が全頭殺処分されたこと、山形県の米澤佐藤畜産様より牛を贈呈して頂いたこと、全共まで飼養管理の取り組みを約五分間で発表し、全国の方に口蹄疫からの復興と感謝を伝えました。黒木さんは、なつみひめ号を担当していましたが、予選で選抜されず、補欠牛となったことから、発表者として参加し、強い想いを伝えるために牧場や寮でも練習に取り組みました。



⑦ 高校の部 体型審査
 審査前日に、出品牛の体位測定がありました。測定結果は次の通りでした。

名号	もみひめ号							
月齢	一四ヵ月							
体高	一二六・二cm	十字部高	一二八・八cm					
体長	一五〇・八cm	胸囲	一七七cm					
胸深	六四・五cm	胸幅	四四・〇cm					
尻長	五一・〇cm	腰角幅	四七・〇cm					
かん幅	四五・〇cm	坐骨幅	二九・五cm					
体重	四二四kg							



⑧ 復興特別出品区 高校の部 総合序列
 牛の体型及び取り組み発表の審査の結果、本校は第二位に相当する優秀賞一席を頂きました。

- 最優秀賞
 岐阜県立飛騨高山高等学校
- 優秀賞 一席
 宮崎県立高鍋農業高等学校
 二席
 兵庫県立但馬農業高等学校
 三席
 宮城県柴田農林高等学校
 四席
 鹿児島県立市来農芸高等学校

ところで、宮崎県の一般の部は、次の成績を収めました。

- 肉牛の部 八区
 内閣総理大臣賞（史上初三大会連続受賞）
 第七区（総合評価群）
 優等賞首席
- 第五区（繁殖雌牛群）
 優等賞首席
- *第二区（若雌の二）
 優等賞五席
 宮崎県立小林秀峰高等学校

今大会の一般の部に出品した小林秀峰高校は、本校と併せて「全共における高校生の活躍」として注目されました。

十 全共を終えて

① チーム宮崎の一員としての自覚

第一一回全国和牛能力共進会の「高校の部」は開会式直後の審査ということですが、生徒は本場に緊張していました。プレッシャーはありましたが、今までやってきた事を信じ、牛を信じて、絶対に首席を取るという気持ちで取り組んできました。体型審査では首席だったものの総合第二位に終わり、生徒は、悔し涙を目に浮かべていました。牛舎に戻ると、宮崎県の畜産農家の方から「本場によく頑張った。素晴らしい。」と言って頂き大きな拍手をもらいました。その時に、チーム宮崎の一員であること、チーム宮崎の凄さを感じることができました。



② 登録検査

登録検査とは、母牛になるための検査です。その牛の体型を審査し、点数が付きます。「ももみひめ」号は、一〇月三十一日に児湯畜連にて登録検査を受けました。全国和牛登録協会の池田審査員から「発育・体積など素晴らしいです。ただ、惜しまれる点としては、尻の形状といった所がありました。」との講評をいただきましたが、八八・三点という高い得点を頂きました。



③ 宮崎県産業教育振興会長賞並びに宮崎県学生栄誉賞の受賞

平成三〇年二月一日、宮崎県産業教育振興会長賞を受賞しました。これは、全国二位という結果が、本県の産業教育の振興に大きく貢献をしたことを認めていただいたと言えます。

また、三月一四日には平成二九年度宮崎県学生栄誉賞を受賞しました。この賞は世界大会や全国大会等において、特に活躍した団体・個人が対象ですので、高鍋農業高校肉用牛経営研究班だけではなく、全共の高校生部門そのものの価値を評価いただいただけでなく、全共の高校生部門そのものの価値を評価いただいただけでなく、これらの二つの名誉ある賞をいただいて学校の名を大きく発信できました。



宮崎県産業教育振興会長賞



宮崎県学生栄誉賞受賞

十一 終わりに

今回、全国和牛能力共進会において、新設をされた「高校の部」に本県代表として出品させて頂きました。最初は何も分からず、生徒・職員に戸惑いもありましたが、それを支えて頂いたのが、都農町の黒木忠雄さん・栄子さんです。過去に岩手全共で日本一を獲得され、日本一の技術や知識、牛飼いの素晴らしさを生徒・職員へ教えて頂きました。

また、宮崎県畜産振興課、全国和牛登録協会宮崎県支部、児湯畜産連合会、獣医の方から、全共までずっと御指導を頂きながら世界に誇る「宮崎牛」の素晴らしさや、日本一に向けた取組の大切さを実感することができました。また、たくさんの農家の方を知る機会にもなりました。

高校の部第二位という結果に、生徒は悔し涙を流しました。この悔し涙が、これから先の大きな希望に変わっていくはずです。生徒の感想文に、「地域に恩返しができ、地域の人に認められる。宮崎牛を守る畜産農家になりたい。」と強い意志が書かれてありました。そして、「牛から学ぶ」ということを学びました。農業教育で一番大切なのが、実践教育です。この実践教育をこの全共を通して学ぶことができました。

私は、農業教育に携わる教員として、宮崎牛の魅力を若い人に伝え、日本一の宮崎牛をつくれる、日本一の人材（畜産後継者）を育成していきたいと思えます。全共はもちろんですが、牛一頭一頭の命を大切にし、牛に感謝、人に感謝、地域に感謝をし、日本一の畜産県、宮崎を盛り上げていこうと思えます。今回の第一回宮城全共で学んだことを生かし、次回の全共に生徒と共に挑戦したいと考えています。本当にありがとうございました。

宮崎県文化講座研究紀要 第四十五輯

平成三十一年三月三十一日 発行

編集 宮崎県立図書館
刊行

〒八八〇〇〇三

宮崎市船塚三丁目二一〇番地一

電話〇九八五―二九―二九一一

印刷 (株)ヒダカ印刷

〒八八〇〇八六二

宮崎市潮見町一三番地五

電話〇九八五―二八―四一―一三

(非売品)

No.

©2019 宮崎県立図書館